

第31回 MASセミナー

気持ち良い空間のための

「繋ぐ」建築

日時：2019/7/06(土)

講演：14:00~16:00

大学に入って初めて住宅設計の真似事をしたときのこと。今は亡き芸術院会員だった先生が、住宅は元々一つの空間だったんだよ。と、教えてくれた。解らないことを言う先生だと思ったが、後に本当だと解った。建築の空間は一つでも良い。しかし色々な事情があって、一旦分けて繋いでいるのである。開口部と呼ばれるものは、いつも不思議である。

(司会進行：湯本長伯/スライド4枚×4分で発表)

『繋ぐ』とは建築そのもの

建築はさまざまな要素で成り立っているが『繋ぐ』という言葉の内にそのことのかなりの部分が集約されていると言える。歴史を一、領域を一、空間を一、機能を一、人を一、などなどだが、これらの要素をどういったバランスで繋げて建築に仕立てるかはその時の考え方や力量が反映してくるだろう。そして観るものはそれらのものを一体の建築として感じている。今回は街と個人の領域を『繋ぐ』具体的な例や、僕自身の仕事のなかでの『繋ぐ』ことの扱いをご紹介したい。



今井 均

「外と繋がる風呂」という発想

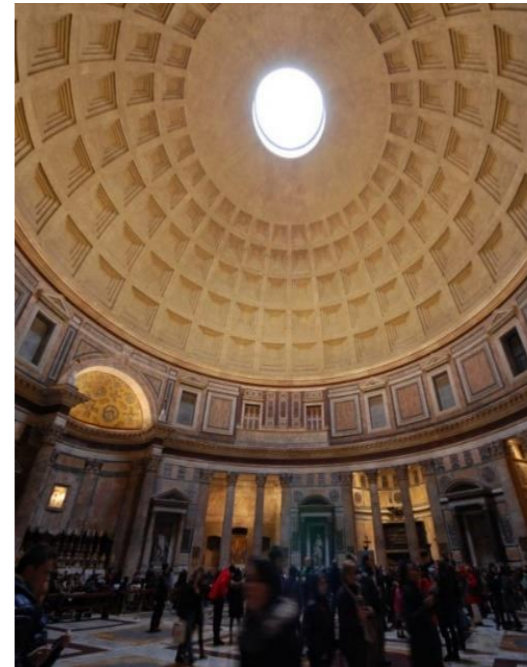
日本人の風呂への愛好、特に露天風呂などへの愛着は、多分どの国にも負けないだろう。それは外気と繋がっている魅力。とは言え、住宅で裸を見せるのに羞恥心もあるし、特に都会に住んでいれば外開きなど暢気なことを言うてはられない。設計者としても浴室を記録写真に撮ってある例はほとんどない。陽が当たり緑が見え外気と大きく繋がる窓があり、水体操も出来てテレビも見れる、本も読めるなんて風呂場が都会で設計出来れば最高だ。四面壁なんて絶対いや！



大倉富美雄

気持ち良い空間のための「繋ぐ」建築

開口部の不思議



公園の緑の景観と繋がれた空間

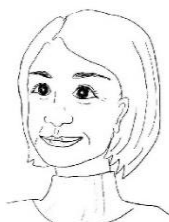
空間をどの様に繋げて行くか・・・建築の設計における根源的な問いだ。私が設計をした“石神井公園ふるさと文化館”では、緑の公園を散策してきた人々を心地良く施設に導き入れるために、1/fゆらぎリズムを伴ったガラススクリーンや、そこに映り込む公園の木々のゆらめきが、内外の空間の間にひとつの連続した景観を生み出すよう計画された。建築学会作品選奨の選評においても評価された、周辺環境との繋ぎ方について紹介したい。



武田有左

「見えないものを繋ぐ」243字

建築を作る際、空間を繋ごうと思えば、窓を作る、壁に穴をあける、透明ガラスで壁をつくる、等、さまざまな方法で「つながる」と考えることがある。さて、ガラスによって隔てられた空間は、繋がっているといえるのだろうか？これは建築設計における難題だ。見えること、つながることは一緒なのか？人は、親しい誰かを思うとき、その人と繋がっていると感じる。「かんじんなものはいつも目には見えないんだ。」(「星の王子さま」)



田口知子

「俯瞰する場」が人を繋ぐ

少し高い場を作ると、周囲との人々との関係を繋ぐことができる。舞台は床を上げることで、周囲の人の視線を集中させ、演者と観客を繋ぐ効果がある。山頂に上れば、遠くの山々まで見渡すことで世界に繋がる。この繋ぐ効果をオフィスに持ち込む。オフィス中央にキッチンを持ち込み、床を少し上げ「俯瞰するキッチン」にすると、人の顔と作業が相互に見えることで、コミュニケーションを誘発する。学校では大階段を作ることで学園全体を俯瞰することでつながりが生まれる。



宮田多津夫

人と蒼穹を“つなぐ”

人が自らを定位するための建築の効用、人と蒼穹を“つなぐ”こと。外と内なる空間の“罅”（いき）とも呼ばれる、作用がもたらされる開口、中間領域。目に見えないはかりしえないものが、建築を介在させることで感じられるようにすることができる。“つなぐ”罅空間を如何につくるかが建築家の醍醐味でもありましょう。もし、ローマのパンテオンに小さな天窗がなかったら？いろいろなたねあかし？をおはなします。



村上晶子

「自然と繋ぐ、街と繋げる」

建築は風雨から身を守るシェルターの役目を持っていますが、閉じた空間では気がめいってしまいます。特に住空間においては、自然採光、風、空、緑、景色と生活空間を繋げることは大切です。これに社会性が加わる、更に街と繋がるのが大切になってきます。これらを如何にして繋げるか？が建築デザインの醍醐味とかと思っています。事例をあげて、一緒に考えてみましょう！



連健夫